

■研究プロジェクト名						
N.(エヌドット)国際救助隊による災害復興、教育支援のための学生「絆」プロジェクト						
【研究の特色・ポイント】						
<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時の復興支援に貢献できる大学の研究・教育活動を遠隔地で実践できるシステムを開発する。</li> <li>・大学の教職員が直接地域に赴き、普段の研究の成果や教育活動を学生と協働で実践する姿を地域の青少年に体感させるためのアウトリーチ活動。</li> <li>・大学が研究・教育活動の社会実験を全国各地で繰り返し行なう、社会貢献と教育支援の還元プロジェクト。</li> <li>・国際社会で活躍できる人間力を育成する、学生と社会の「絆」づくり実践プロジェクト。</li> </ul>						
【研究の背景】						
<p>総合大学の資源を有効活用し、他校では成し得ない大規模な社会還元と人材育成のプロジェクトの実践を通じて、教育力の高さを世間に周知する可能性に挑戦したプロジェクトである。</p> <p>豊富な人材と専門性を生かし、突発的に生ずる災害に対する予測、救援、支援、復興にわたる様々な技術開発とその適切な対策・運用方法の検討を、特定の地域と連携した社会実験を通じて実践することを考えた。これは、地域性に応じた災害対策や地域の活性化、地域医療や教育のロールモデル確立につながることで、今後の豊かな社会づくりと科学技術促進に大きな影響を与えるものであることに確信をもったことが背景となった。</p>						
【研究成果の概要】						
研究期間	平成	25	～	26 年度	研究費総交付額	40,000,000 円
<p>日本大学の「知」を俯瞰で探求し、高いモビリティを実現させるために地域の「災害復興支援」「医療福祉支援」「教育支援」のためのコンテンツを、研究者や学生たちと社会実験を繰り返しながら社会還元する方法を開発することで、世界の舞台で活躍できる人材を育成することにコミットした研究プロジェクトである。</p> <p>実施した多くの社会実験や発表、研究成果の展示等をN.RESCUEのブランドで括り、日本大学の「知」を社会に還元するためのスマートモビリティシステムを運用しながら学生の絆づくりを目指し社会実験を繰り返した。</p> <p>結果として、131名に及ぶ学生が様々な学部から隊員として参加し、日本の宿命といえる防災について、研究者と学生たちが専門の研究によってつながる未来を還元することに向かう意志を創出した。</p>						

**N.** (エスドット)国際教助隊による災害復興、教育支援のための学生「絆」プロジェクト  
**研究の目的と意義**



第3回国連防災世界会議採択におけるフォーラム 仙台市総務局にて2015年3月18日

**【研究成果の意義・効果】**

- 1) 研究・教育活動の推進の見える化と、社会実験というアウトリーチ活動の方法が、本学のオリジナリティのある運営の創出に貢献できるアイデアを提供できる。
- 2) 災害対策や復興支援に貢献できる研究・教育活動を「スマートモビリティシステム」によって遠隔地で社会実験するこの社会還元のロールモデルは、日本大学のブランディングに多様性をもたらすことができ、広報的価値と効果を生み出すことができる。
- 3) 研究者の研究を発掘することで、研究者同士のつながりが見えてくる。貧困問題と感染症のつながり、動物園と微生物、食品、トイレなどすべてがつながっていることから、新しい研究のKIZUNA(絆)を運営戦略的な見方でも発見できる。
- 4) 出前授業やサイエンスカフェなど地域への支援に必要な体験学習や実験を継続することで、未来の考え方や研究の発展につながる「知」の流動性(スマートモビリティ)が創出でき、持続的社会へのアウトリーチの還元方法が発見できる。
- 5) 水上飛行機を利用した水上空港ネットワーク構想の開発、宇宙エレベータの開発、ドローンを使ったロジスティック運用や災害支援・救助に関しての計画・実験などは、災害国日本の未来に効果を示す具体的な研究であり、社会実験によって日本大学の総合力をアウトリーチできる。
- 6) キューバやミャンマーなどのアジアへの支援展開が、大学として社会実験できるようになれば、研究者や企業、組織のつながりから共に世界に貢献できる。
- 7) 本研究がひとり歩きすることが目的であり、大学の使命効果になる。